

国語科

他者の言葉とかかわり合い、物語世界を楽しむ

—第2学年 文学的文章の実践をとおして—

杉川千草

1 はじめに

文学的文章は、ある状況における人間の生き方を言葉によって表現したものである。したがって、読み手は、言葉によって創り出された実際には存在しない世界を、作品の言葉をもとに想像しながら読んでいかなければならない。つまり、「読む」という行為は、読み手が作品の中の言葉をもとに、自分なりの作品世界を創り出していく一つの創造活動である。

学習指導要領によると、低学年における読むことの指導では、「楽しんで読書しようとする態度を育てる」ことが求められている。担任している2年生の子どもたちには、家から本を持ってきて友だちに紹介したり、休憩時間などに読書に親しんだりする姿が見られる。保護者や教師の読み語りを楽しみ、「おもしろくて楽しい。」「いろいろな世界が広がる。」という理由で、多くの子どもが読書を「好き」と答える。その一方で、「文章が長い。」「本を読む時間がない。」などの理由で、読書を好まない子どももいる。そこで、文学的文章の読みの指導をとおして、読むことに対する抵抗感をなくして物語世界を楽しませ、読書の幅を広げるきっかけづくりをしたいと考えた。

2 研究の構想

(1) 他者の言葉とかかわり合う

日々の国語科の授業において、子どもたちは、他の学習者や教師などのほか、テキストの筆者や過去の自分など、さまざまな他者と出会っている。子どもたちは、さまざまな他者の言葉とかかわ

り合いをとおして、自分の言葉を見つめ直し新たな言葉を獲得していく。また、学習の深まりを確かめたり、他者とともに学習することのよさを実感したりする。そして、このような営みを繰り返すことによって、語彙を増やし表現力を豊かにするとともに、新たな認識を広げ学びを深めることができる考える。

(2) 物語世界を楽しむために

物語世界を楽しむために、次のことに留意した単元（授業）構成を行う。

①教材との出会わせ方を工夫する

子どもたちは、社会や学習の中で、さまざまな他者の言葉に出会う。子どもたちが言葉の世界をひらくためには、言葉への興味・関心を引き出し、課題意識や目的意識をもつことが大切である。そこで、教材との出会わせ方を工夫し、挿絵や題名からイメージを広げたり内容を予想したりすることによって、子どもたちの興味・関心を引き出し読みの課題意識をもたせる。また、同じシリーズの作品を重ねて読むことによって、登場人物の関係や物語の展開の共通性をつかませ、物語世界を楽しませるようにする。

②単元の見直しをもたせる

子どもたちの主体的な学習を引き出すためには、目的意識や見直しをもって学習に取り組ませることが必要である。そこで、単元のはじめに学習計画を立てることによって、学んだことを自らの表現活動に生かすことのできる単元を貫く言語活動を設定する。表現することは、自分の考えを他者に伝えるとともに、自分自身に問い直して自己の考えを確かなものにし、学習を深めることにもつながるものである。そこで、単元の終わりに

は、学習したことを再構築して表現させることによって、作品のおもしろさや楽しさを共有させるようにする。

③個の考えをもち、他者と交流させる

読みは一人ひとりそれぞれ異なり、最終的には自分に返るものである。そこで、一つひとつの言葉から感じたことや率直な疑問などを書き込むことによって、自分の考えをもたせるようにする。そして、一つの課題に向かって、自分たちの考えをお互いにかかわらせながら学習を深めていくことができるような授業づくりをしていく。授業の終わりには、他者の言葉から学んだことを確かめさせるようにする。このような学習を繰り返し行うことによって、他者とともに学ぶことのよさを実感させ、子どもたちの主体的な学びを生み出し、学ぶ意欲を継続させるようにする。

3 実践「心のうごきを読みとろう『お手紙』 アーノルド＝ローベル 作・絵 三木卓訳 (学校図書二下)」

(1) 授業の構想

①単元について

親友の悲しみを自分の悲しみとして受けとめ、一通のお手紙をとおして二人の心のつながりが一層深まっていく様子が描かれた物語である。今まで一度もお手紙をもらったことがないと嘆くがまくんを喜ばせようと奔走するかえるくんのやさしさが物語全体を貫いている。物語は二人が不幸せな気持ちから幸せな気持ちになるまでの推移が中心で、一生懸命なあまりかえってユーモラスな展開になっている。文章は主に会話文から構成されており、それぞれの人柄や心情が表れている。ここでは、物語への同化と異化を体験しながらがまくんとかえるくんの心のつながりやほのぼのとした物語世界のおもしろさを楽しませたいと考えた。

指導にあたっては、最初と最後の2枚の挿絵の比較から物語の内容を想像させ、読みの課題意識をもたせるようにした。場面ごとの読みでは、会話文をもとに二人の気持ちを想像させ、読み取っ

たことを書きとめておくことによって音読発表会に生かしていくようにした。その中で、登場人物に寄り添いながら二人の心のつながりを読み取ると共に、読者の立場から物語のほのぼのとしたおもしろさに気付かせるようにした。また、教科書の本文だけでなく「がまくんとかえるくん」シリーズの他の物語も紹介することによって、二人の心のつながりが常に変わらないものであることに気付かせ、物語世界をより一層楽しませるようにした。

②目標

- 読書に関心をもち、物語を楽しんで読もうとすることができるようにする。
- 会話文や挿絵をもとに読み取った登場人物の気持ちや、登場人物にあてた手紙を書くことができるようにする。
- 登場人物の行動や会話に注目して登場人物の気持ちを想像しながら読み、心のつながりをとらえることができるようにする。

③学習計画(全14時間)

- 第1次 「がまくんとかえるくん」を読もう
・・・・・・・・・・2時間
- 第2次 「お手紙」を読もう・・・・・・・・・・9時間
・学習計画を立てよう(3時間)
・場面ごとに読もう(4時間)
・物語のおもしろさを楽しもう(2時間)
- 第3次 音読発表会をしよう・・・・・・・・・・3時間

(2) 授業の実際(〇児とT児の記録を中心に)

〈第1次 「がまくんとかえるくん」を読もう〉

①第1時 「はるがきた」を読もう

教科書の本文を読む前に、「お手紙」が収録されている「ふたりはともだち」(文化出版局)の本の中のお話を読ませ、がまくんとかえるくんが登場する物語世界に触れさせたいと考えた。そこで、まず「はるがきた」という題名を提示し、どんなお話だと思うか想像させたところ、次のような意見が出された。

- ・「春が来てほしい」とみんなが願っているお話
- ・季節が変わって春になったお話
- ・春が来るにつれて、主人公がうれしそうにして

いるお話

- ・2年生が、春になって3年生になるお話

その後、最初と最後の挿絵を見せて、がまくんとかえるくんが登場する「はるがきた」はどんなお話だと思うかを想像させ、プリントに書かせた。

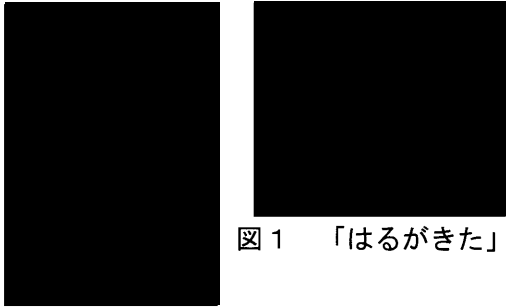


図1 「はるがきた」

秋におちたはっぱを冬にあつめたら、また風がふいて、そのくりかえしになってとうとう春が来る。がまくんとかえるくんは春がいちばんすきだから、「また来年におちたはっぱをいっしょにはこう。」というお話だと思います。(O児)

かえるくんががまくんの家に行って、二人でいっしょにおちゃをのんで、雨の日に外に出てあそんで、雨がやんだら二人でいっしょにさん歩する。そして、かえるくんの家に行っていっしょにあそんでがまくんは帰る。

(T児)

子どもたちが想像した話をいくつか交流させた後に本文を読み聞かせると、がまくんを早く起こしたいあまりにカレンダーを破るかえるくんの行動に、子どもたちは大笑いだった。その後、感想を書かせて授業を終えた。

かえるくんは友だちとしてがまくんとあそびたいのに、がまくんがねていてあそべなかったから、カレンダーを5月までめくっていたのでおもしろかったです。カレンダーのページがなくならないのかなと思いました。カレンダーのページをポイポイすていたので、大わらいをしました。おもしろかったです。(O児)

ほんものは、がまくんがずっとねていたので、わざと4月のカレンダーもやぶいてがまくんをおこしたのがとてもおもしろかったです。ぼくの話は「二人で楽しくいろいろなことをした」という話でした。話がちがっていたので、とてもふしぎでした。(T児)

②第2時 「なくしたボタン」を読もう

はじめに、前時に書かせた感想をいくつか紹介した。その中には、次のような登場人物の言動のおもしろさに着目している子どもがいた。

- ・がまくんがねすぎなのがおもしろい。
- ・「でたらめいってらあ。」というがまくんの言葉がおもしろい。
- ・がまくんが「ぼくここにいないよ。」と言ったのに、家の中にいるのがおもしろい。
- ・がまくんが、かえるくんにだまされたことに気付かずに、さん歩に行ったのがおもしろい。

そこで、今度は「なくしたボタン」という題名を提示し、どんなお話だと思うか想像させたところ、次のような意見が出された。

- ・二人がいっしょにボタンをさがすお話
- ・二人ともボタンをなくして見つけるけれど、それが反対に入れ替わるお話
- ・なくしたボタンが足のうらにくっついていてお話

その後、最初と最後の挿絵を見せて、がまくんとかえるくんが登場する「なくしたボタン」はどんなお話だと思うかを想像させ、プリントに書かせた。

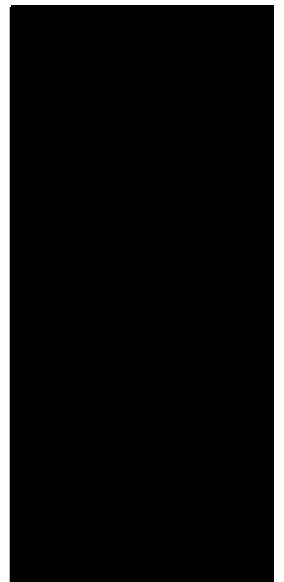


図2 「なくしたボタン」

かえるくんはちゃ色いうわぎで、がまくんはみどり色だから、「体に合う色がいいね。」と話合ってふくをかえて、かえるくんが「このボタンはぼくがさがすよ。」と、友だちのことを大切に思う話なんだと思います。(O児)

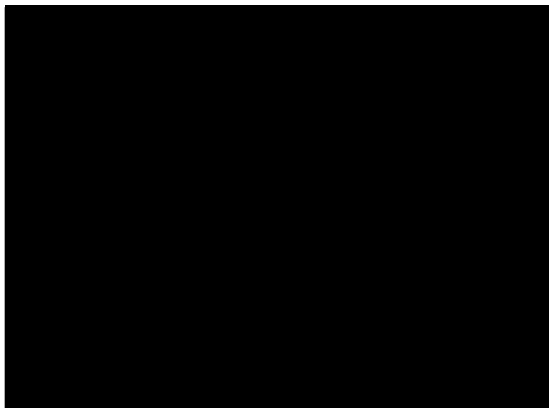
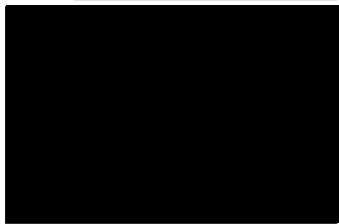
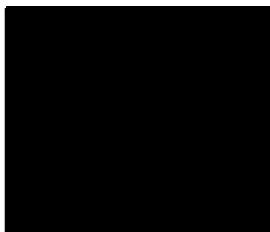


図3 「なくしたボタン」を読もう

- ・がまくんが，家の中で
がっくりして悲しそう。
- ・何かになやんでいて，今
にもなき出しそう。
- ・がまくんは悲しそうだけ
ど，かえるくんは
のん気に「こんに
ちは。いっしょに
あそぼう。」と言っ
てやって来た。



○最後の絵

図4 「お手紙」

- ・二人ですわってお話をしている。
- ・何かを見ている，まっている。
- ・二人ともにつこり，うっとりしている。

その後、「お手紙」という題名を提示し，がまくんとかえるくんが登場するどんなお話だと思いか想像させ，プリントに書かせた。

がまくんがかえるくんのうわぎをきて「あれ？ボタンが一つないよ。」と言って，かえるくんも「ほんとか！」と言い，二人で川をさがしたら石にはさまって，それをぬこうとしてとんで行ったら，ボタンがぬけたというお話だと思います。(T児)

子どもたちが想像した話をいくつか交流させた後，本文を読み聞かせ，感想を書かせた。中には，おもしろかったところだけでなく，自分の想像したお話と比べながら感想を書いた子どももいた。

自分の作った話とはちょっといみがちがっていたんだけど，「友だちが大切」ということは合っていました。そして，かえるくんはうわぎをもらってピョンピョンはねているけど，わたしなら「ありがとう。」を何回も言います。(O児)

ぼくの話は「ボタンがないよ。」ではじめたけど，ほんものでは，みんながんばってさがして，けっきょくがまくんが家におとしていたというお話でした。みんな「もうがまくん，しっかりしてくれないとこまるよう。」と思っていたらなあ。(T児)

〈第2次 「お手紙」を読もう〉

①第1～3時 学習計画を立てよう

第1時は，「お手紙」の最初の挿絵と最後の挿絵を見せ，わかることをあげさせた。

○最初の絵

- ・場所はがまくんの家。

がまくんとかえるくんがいっしょにお手紙交かんをして，何日も何百日もお手紙交かんをしたからとうとうあきて，「ほかの人からお手紙が来ないかな。」とまっているお話だと思います。(O児)

がまくんがぼんやりしているところにかえるくんが「ハロー。」と言って来て，がまくんといっしょにさみしいお話をした後に楽しいお話をしたお話。(T児)

その後，本文を読み聞かせ，自分の想像した話と比べたり，「はるがきた」や「なくしたボタン」と関連付けたりしながら感想を書かせた。

「はるがきた」も「なくしたボタン」も「お手紙」もがまくんとかえるくんが出てきて，さい後には二人がにつこりする話でした。かたつむりくんが四日もかかって来たのがおもしろかったです。かえるくんはがまくんのことごとってもすきだから，いい気もちになれる手紙も書けるし，さい後の場めんではどのお話も二人ともにつこりできるんだと思います。(O児)

ぼくの作ったのはただお話をするだけだったけど、ほんものは「まつ」などのできごとのお話でした。そして、「なくしたボタン」と同じで「手紙が来ない!」「ボタンがない!」というところがとてもおもしろかったです。「はるがきた」ともにているところがありました。がまくんがねているところです。(T児)

次の時間は、初発の感想を交流させた後、みんな学習したいことをあげさせた。それらを整理して、全体での学習課題や単元全体の大まかな学習計画を次のように決定した。

- がまくんとかえるくんの仲がいいところを見つける。
- がまくんとかえるくんの性格や気持ちを読み取る。
- 「お手紙」のおもしろいところを見つける。
- オリジナル「お手紙」をつくる。
- 「がまくんとかえるくん」シリーズや、アーノルド＝ローベルの他の作品を読む。
- 音読発表会をする。

②第4～7時 場面ごとに読もう

場面ごとの読みでは、「がまくんとかえるくんの仲がいいところを見つけよう。」を主な学習課題として、学習計画に基づいて授業を組み立てていった。子どもたちは、学習課題についてそれぞれ自分の考えをもち、それを交流した後に学んだことをまとめるという流れで授業を進めた。

その中で子どもたちは、がまくんとかえるくんの仲がいいところを見つけることをとおして、がまくんとかえるくんの性格や気持ちを読み取っていった。

③第8・9時 物語のおもしろさを楽しもう

がまくんが「とてもふしあわせな気持ち」から「ともしあわせな気持ち」に変容した理由を考えることによって、かえるくんと心のつながりを読み取ると共に、物語のおもしろさに気付かせるようにした。授業のまとめとして、読者の視点から登場人物に宛てて手紙を書かせた。

次の時間は、「がまくんとかえるくん」シリーズの4冊の本を紹介し、その中から「よていひょう」「おちば」を読み聞かせた。子どもたちは、「お手紙」と共通する物語のおもしろさや、がまくんとかえるくんのほのぼのとした心のつながりを楽しんでいた。

〈第3次 音読発表会をしよう〉

これまでの学習をもとに、それぞれの場面の本文に登場人物の言動を書き加えて「オリジナルお手紙」とし、それを台本として音読発表会を行って単元を終えた。

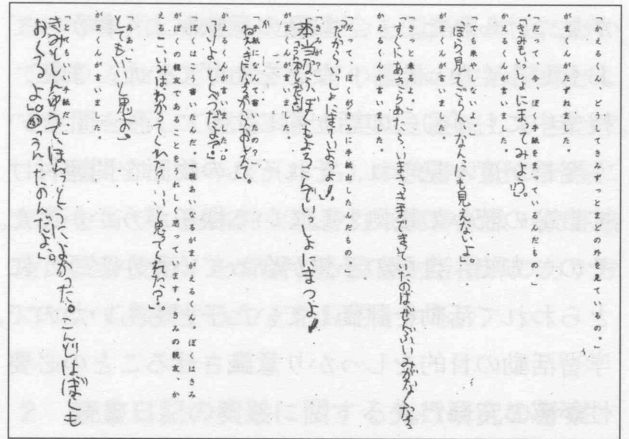


図5 音読発表会の台本



図6 「がまくんとかえるくんは・・・」

4 考察

学習の様子や事後アンケートから考察する。

(1) 教材との出会わせ方を工夫する

今回の実践では、教科書の本文を読む前に、同じシリーズの本に出会わせ、挿絵と題名から内容を想像させた。その結果、次のようにどの物語にも共通するおもしろさを見つけることができた。

- ・いつもがまくんがかえるくんに甘えて、めんどろをかけている。

- ・かえるくんはいつもがまくんのことを思っているけれど、がまくんはかえるくんの気持ちになかなか気付かない。
- ・二人とも仲良しすぎてこんがらがるのがおもしろい。

また、「挿絵から物語の内容を想像したり本当の物語と比べたりすることは、学習に役立った。」と答えた子どもは、37名（1名欠席）中34名いた。その理由として、「どんな話か知りたくなる。」「比べるとおもしろいところがわかる。」「自分のお話と比べて、すごいなとかおもしろいところが見つけれられた。」「お話の意味がよくわかっておもしろくなった。」などをあげていた。また、授業中にも「〇〇の話と同じように・・・」という発言が度々見られ、それぞれの物語を関連付けて自分の読みの根拠としている様子が見られた。その一方で、自分の予想が合っていたかどうかにとらわれて活動を評価していた子どももいたため、学習活動の目的をしっかりと意識させることの必要性が感じられた。

(2) 単元の見直しをもたせる

単元のはじめに学習計画を立て、読み取ったことを生かした音読発表会を設定したことについて、34名の子どもが「楽しかった。」と答えている。その理由として、「気持ちやセリフを付け加えて、もっとくわしくなった。」「お話が長くなって、みんなが言う言葉が増えた。」「自分たちで作ったお話を読むほうが楽しいし、想像の世界に入れる。」などをあげており、学習への肯定的な評価や満足感につながったようだ。しかし、3名の子どもは、「(台本作りが) 難しかった。」と答えていたので、場面ごとの読み取りの段階からの細かい手立てを積み重ねていくことが求められる。

(3) 個の考えをもち、他者と交流させる

授業の中で各自の読みを交流した後、学習をとおしてわかったことや考えたことをまとめさせるようにした。その結果、33名の子どもが「友だちの意見が自分の学習に役立った。」と答えた。その理由として「自分とは違う意見が出たから、いろんなことがわかった。」「友だちの意見で、新

しい考えがうかんだ。」「自分の知らないことをみんながいっぱい教えてくれたので、次の学習に生かせる。」などをあげていた。

場面ごとの読みでは、登場人物になりきって気持ちを発表する発言から、友だちの思わぬ一面を発見し、拍手する姿が見られた。また、登場人物の言動を客観的に読み取っている発言から、新たな読みに出会う子どももいた。ワークシートにも、友だちの「おっちょこちょいな君が大好きです。いつでもぼくをたよっていいですよ。」という発言に対して「かえるくんががまくんを大切にしていることがわかった。」「かえるくんのやさしさに気付いている。」という記述が見られた。また、「お手紙ほしいなあ。でもぼくなんかにお手紙くれる人なんかいないだろうなあ。」という発言に対しては「がまくんが目の前にいるみたいに気持ちを読み取っていた。」「がまくんの心の中の気持ちまで読み取っていてすごい。」などの記述が見られた。

その一方で3名の子どもは、「あまりいい意見がなかった。」「自分の考えの方がよかった。」と答えていたので、授業の中で一人ひとりの考えのよさを認め合い、お互いの読みを共有し合う場面をつくっていくように努めたい。

5 おわりに

今回の実践では、重ね読みによって物語の世界を楽しみ読書の世界を広げることができた。学習後、図書室で同じ作者の本を自分で探し出して読むなど、読書を楽しんでいる姿が見られた。今後も、実生活につながる読みの指導をしていきたい。

<参考文献>

- 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 国語編」, p. 38, 2008, 東洋出版社.
- 浜本 純逸：『文学の授業づくりハンドブック 第1巻』, pp. 85-100, 2010, 溪水社.
- 五味 太郎：『絵本をよんでみる』, pp. 135-172, 2006, 平凡社.